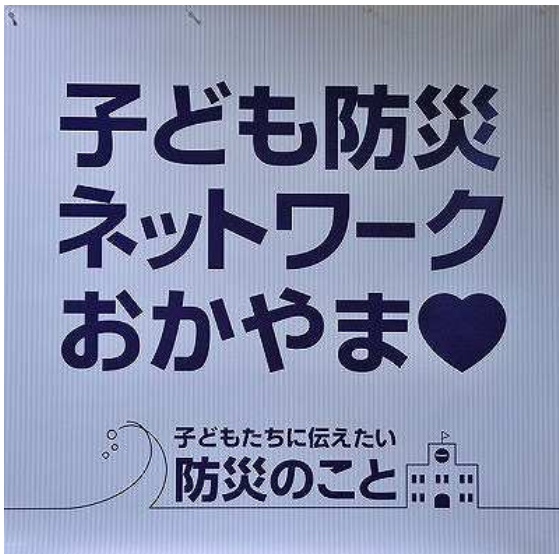


親子鑑賞会 人形劇「稲むらの火」

2013年5月12日 岡山国際交流センター 国際会議場



開場を待って並ぶ親子連れ。プログラムを手に、稲むらの話を小さな子どもにしているお年寄りの姿も。

オープニングに登場したハンスが「子ども防災ネットワークおかやま」のことを紹介。災害の少ない岡山だからこそ、地震や津波のことをよく知ってそれに備え、自分の命や家族の命を守れるようになりたいねと子どもたちに語りかけた。フリーアナウンサーの遠藤寛子さんは手話通訳とMCを同時に行うという、むずかしい役どころに笑顔で挑戦。会場のろう者のために、当日は、岡山県聴覚障害者協会から手話通訳士も参加（右端）。





五兵衛の勇気と知恵で生き残ることができた村人たちは、津波のことを子孫に伝えていくことを誓うのだった。

人形劇のあとは災害時に知っておくと便利な知恵を紹介。オタスケマンの仕草に子どもたちの笑い声が上がった。



聴覚障害者でも、拍手をしていることがわかるよう、大きく手を広げてヒラヒラ動かして見せる「静かな拍手」。



場内では、3月に「子どもたちに伝えたい防災のこと」でも使用したパネルで、子ども防災ネットワークおかもやまの活動や、災害イマジネーションを養う防災体験プログラム、地震直後のサバイバルに必要な知恵を紹介。



終演後、デフ・パペットシアター・ひとみのメンバーと人形たちがお見送り。興味津々で見つめる子どもたち。



くらしき作陽大学で児童教育を学ぶ学生たち。終演後、操り人形や人形劇舞台を見学、操りの説明を受けた。



読売新聞 2013.5.16 | 人形劇「稲むらの火」…津波の怖さ教える人形劇・北区 親子鑑賞会に400人
同日の紙面に災害図上訓練の様子も。岡山でも、防災減災に対する意識は高まりつつある。



「子ども防災ネットワークおかやま」の活動の原点ともいえる言葉を、人形劇のオープニングでハンスに語らせた。

2年前、東日本を大きな地震が襲った。そして見たこともないような大きな津波が たくさんの命を奪った。

世界中の人が困っている日本を助けてくれて、日本のなかで地震や津波の来なかった地域の人たちも、なにか自分たちにできることがないか、一生懸命、考えた。



岡山では、全労済岡山県本部のおじさんやおねえさんたちが、子どもたちのためにいつも活動している人たち(※)に声をかけて「子ども防災ネットワークおかやま」という チームを作った。

それでね。子どもたちに、自分の命を守ること、そして友だちや家族の命を助けるために自分ができることをこれからも、ずっと 教えることにしたんだって。

=====

子ども防災ネットワークおかやまは、2011年10月に発足し、県内の幼稚園・保育園への「防災体験プログラム」の出前授業、2012年、2013年3月に倉敷市と共催で行った「子どもたちに伝えたい防災のこと」など、さまざまな活動を続けています。(※) =岡山県子ども劇場センター、笠岡子ども劇場センター、岡山市子どもセンター、一般社団法人チカクの4団体を指します。

子ども防災ネットワークおかやま 活動報告 <http://kodomoinoti0311.seesaa.net/category/11780824-1.html>